高等学校「体育理論」領域における授業作成の試みに関する研究
－単元「トップアスリートの栄光と没落」の事例を基にして－

スポーツ文化研究領域
５０１３Ａ０５９－３　　松田　広　　研究指導教員：友添　秀則　教授

【問題の所在】

現行の 2009（平成 21）年，「高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編」が公示され，2013（平成 25）年に「体育理論」領域が完全実施された．改訂において，高等学校の「体育理論」領域の指導内容が社会的視点から強調され，限られた時間配当の中で，いかに授業を展開していくかという，授業実践の確実な定着が求められている．そして，友添が指摘するように，運動やスポーツを「する」ことだけでなく，スポーツの文化的価値を学ぶことも求められている．したがって，運動やスポーツの仕方，運動やスポーツの原理や原則，スポーツの文化的意義を理解させる，体育を実現させていくには，「体育理論」を学ぶことは極めて重要であるといえる．

【先行研究の検討】

高等学校の「体育理論」領域の指導内容の特徴として，社会的視点からの内容が強調されていることから，現代のスポーツの特徴的な内容に関する先行研究と「体育科教育」領域の先行研究について検討した．その結果，ドーピング問題を取り上げ，倫理的な基準を設けることが大切であること（真田，2008）や，スポーツの価値を保護する上で，アンチドーピング教育が有効であること（依田・北村，2012）が導出された．そして，ドーピングは選手の健康をそこねるだけでなくスポーツ倫理に反し，薬物の濫用が社会悪の温床になる卑劣な行為であること（友添，2012）や，アテネ五輪を題材にして「平和と人権」をキーワードに授業を実践していること（成瀬，2005）が明らかになった．しかし，ドーピングに手を染める背景など事例を多面的に示し，学習指導が工夫された授業実践が極めて少ないことが示された．

【研究の目的・方法】

本研究は，「体育理論」領域の「ドーピング」単元の授業において，単元の教材づくりを目指して，単元「トップアスリートの栄光と没落」の事例を基に作成し，授業実践を通して，その開発した教材の授業評価を行う．具体的には，「授業評価尺度」・「知識・理解」理解度票・「ルーブリック」評価表を作成し，実証授業を行い，データの収集および分析を行う．そして，その結果と課題から考察し，「体育理論」領域における教材づくりの視点と方法を提案することとした．

【各章の概要】

〈第 1 章〉

第 1 章では，体育科教育において，「教材」がどのようにとらえられてきたのか，教材とは何か，教材概念の変遷ととらえ方を明らかにし，教材づくりの意義を明確にした．教材づくりの意義を明確にした上で，教材づくりの基本的視点を示し，単元「トップアスリートの栄光と没落」におけるワークシートとプレゼンの作成と比較検討するための従来通りの教材の作成をした．次に，単元における

授業を構成し，学習指導案を作成した．作成した教材で，予備調査（授業実践）を行い，「授業評価尺度」を作成するための，資料・データの収集を行った．また，開発した教材の修正点を抽出し，ワークシートとプレゼンテーションに用いる資料の修正を行った．

〈第 2 章〉

授業の効率化や授業の改善を図っていく上で，授業評価は重要な役割を果たすものである．そのため，第 2 章では「授業評価尺度」・「知識・理解」の理解度評価票の作成および，学習成果を知るための「ルーブリック」評価表を作成することを目的とした．学習者による授業評価は，授業の課題を導き，授業改善につながる（坂本ら，2011）こと，また，授業評価尺度の作成については，形容詞間の認識の差異を極力少なくすることが（鎌原ら，1998）重要とされていることから「授業評価尺度」の作成に向けた予備調査を行った．その結果，授業評価の構成概念として，「学習成果に関する項目」「気づきや思考に関する項目」「関心・意欲に関する項目」「理解しやすさに関する項目」という 4 つが見出され，内容的妥当性の検証から，「授業評価尺度」の 24 項目を選定した．次に，先行研究（岩野，2013）において，生徒の学びのありようを，ワークシートや授業後のアンケートの結果から比較して検証していることから，「知識・理解」の理解度評価票の作成に向けた国立教育政策研究所（2012）の評価規準や使用教科書や指導書の学習内容から抽出し，「知識・理解」の理解度評価の上位項目の 5 項目と上位項目を形成する下位項目の 15 項目を定めた．そして，ルーブリックの作成は，客観的な評価ができる記述が大切（松尾，2005）であるという．このことから，「ルーブリック」評価表の作成に向け，学習者の発問に対する回答から 24 個の判断基準から 5 つのカテゴリーを抽出し 4 段階で「ルーブリック」を作成した．

〈第 3 章〉

第 3 章では，第 1 章で作成した教材と第 2 章で作成した「授業評価尺度」,「知識・理解」の理解度評価票,「ルーブリック」評価表を活用し，実証授業を県立の高等学校 1 年生 507 名を対象に実施した．「授業評価尺度」は因子分析によって 3 因子を抽出し，下位尺度には十分な内的一貫性を確認した．

また，「知識・理解」の理解度評価の結果を t 検定にかけた結果，「自由記述 1・4・5」において，開発した単元の方に，有意な差がみられたが，「自由記述 2・3」については，有意な差がみられなかった．これは，基本的な学習内容であったことが要因として推察された．「ルーブリック」評価表の結果より，いずれの発問においても，平均値が 3 点に満たない得点であった，これは，レベル S の回答の頻度が極めて少ないことと，レベル C の回答が多いことがうかがえた．以上より，総体的に開発した単元の方が有意に高い傾向にあることが明らかになったといえる．

【本研究の総括と課題】

本研究で開発した単元は，従来通りの単元に比べ有意な差が認められた．しかし，本研究は，「体育理論」領域における，教材づくりの視点と方法を提案することを目的としていたため，開発した単元の評価をするだけではない．単元に登場する人物に着目し，学習者の内面に響き，「スポーツの意義や価値」をじっくりと育む教材づくりと，本研究のプロセスを可能な限り繰り返すことによって，教材づくりの有効性を高めていくことが可能になるものと考える．